

竹富町調査報告書

鳩間島担当院生 028127B 下地治人

グループテーマ：鳩間島にすむ人々はどのように結び合って生活しているのか。また、鳩間島とその他の島々は、どのように結び合っているのか。

調査対象：鳩間島の棒

テーマ：鳩間島の棒は、島民と豊年祭をどのように結び付けているのか

以下より、7つの疑問項目についての調査報告をする。今回の報告書では、鳩間島の豊年祭における棒を具体的に教材化する祭に考えている視点を取り入れて、疑問項目以下の質問項目を作成した。いかに、教材化における視点を述べる。

(1)棒に使用する具体物について、学ぶための視点

(2)豊年祭における棒の伝承やその運営の中で見られる人と人との結び付きが見え、学ぶための視点

(3)豊年祭における棒の意味を考えると、その他の演目の意味や役割、豊年祭の意味、それらを取り巻く人々の結び付きが見え、学ぶための視点

の3つである。

1. 棒の概要及び豊年祭においてどのような意味・役割があるか

棒について、琉球芸能辞典において「沖縄の棒には、棒踊り、棒振りという踊りの要素を持つものと、棒術という武技的要素を持つ2種がある。」¹述べられている。ここでは、特に、棒について述べていくものとする。

まず、それが行われる鳩間島の豊年祭について述べる。八重山諸島では、豊年祭を旧暦の6月に行う。プールやプーリー（穂利）と呼ばれている。本田は、「プーリーとは、南の島々、八重山諸島における豊年祭をいう。（中略）旧6月の第1期稲作の収穫後、日を定めておこなわれる。祭は3日を要するが、第1日は願解（パヅリ）といって、前年の願いを解く祭、第2日は当年の豊作を感謝する祭、第3日が『世願い』（ユニガイ）、翌年の豊作を祈る祭である。」²と述べている。では、鳩間島の豊年祭について述べる。本田は、「旧6月、2日間おこなわれる。前日に弥靱の行列があり、東西より出る。それぞれ男は棒、女は踊支度で行列する。（中略）翌日は綱引きがおこなわれる。綱引きは西が勝てば世がよいとて西を勝たす。『綱の耳』あり、双方から女2人が出て、歌に合わせて剣を打合わせる。」³と述べている。ここでは、棒がおこなわれているという記述は見えない。しかし、男が棒を持って行列に参加することからなんらかの形で棒が演じられていると考える。また、鳩間島の豊年祭は2日間であると述べられている。

¹ 当間一郎監修「琉球芸能事典」1992年那覇出版社 P63 より引用

² 本田安次「沖縄の祭と芸能」第一書房 1991年 P84 より引用

³ 本田安次「沖縄の祭と芸能」第一書房 1991年 P99 より引用

一方、鳩間島の豊年祭について当間は「豊年祭は旧暦6月27日から3日間行われた。毎年、旧暦6月中旬から下旬へかけてのミズノエの日から3日間行われるという。」⁴と述べている。棒踊については、2日目に「4番目に西村の棒があり、ひきつづき数番の踊りと東村の棒と踊りが棧敷の前の広場で世（ユー）をもたらず神への奉納として演じられた。」⁵と述べている。ここでは、棒は、神への奉納として西村と東村にわかれ演じられていることがわかる。また、豊年祭の期間は3日間であると述べている。

以上より、豊年祭の期間に違いが見られることがわかる。また、棒についても、違いが見られると考える。ただ、共通して指摘できることは、鳩間島における棒についての記述は詳細でないと同時に少ないということである。豊年祭における意味・役割について、当間よりわかることは、棒は、豊年祭において神への奉納芸能であることである。本田は、棒踊りの意味・役割を「棒を交差することが、種物教授と同じ意味を持ち、また1種の悪魔払いのようにも考えられている。」⁶と述べている。

以上は、本田、当間の両氏の述べた文献より鳩間島における豊年祭及び棒について引用し述べた。これより疑問点として、以下に示すことができる。

① 鳩間島の豊年祭は、2日間なのか3日間なのか。

このことについては、現地の聞き取り調査で明らかにしたい。

② 豊年祭における棒についての詳細。

2.鳩間島でつくられたものか。

沖縄全体の棒について述べたものではあるが、まず、棒の成立について述べる。

玉木（「琉球横笛再考」玉木繁編著那覇出版社2000年5月）は、棒踊りの誕生について、5つの視点から考察を行っている。

まず第1に、沖縄では鉄材が産出せず貴重品であったこと。そのことが、鉄材を材料とする刀剣などの武器は、一般の人々の手には容易に渡らない理由になる。そのため、身を守るために農具の鍬や鎌、櫛、その他の生活用具の鍋やふたや石臼の把手など身の回りのものを武器として使用したためであると指摘する。

第2に、尚真王による諸按司の武装の解除などを指摘している。禁武政策のことだと言える。

第3と第4では、ミクロネシア系の棒踊りが、沖縄に伝播したのではないかという説を立てている。その中で、鹿児島県の大隈地方の棒の打ち合いと沖縄県の石垣市新川の棒踊り、ミクロネシア連邦のヤップ島の棒踊りが全く同じであると述べている。

第5では、伊波普猷の説を取り上げている。この説は、どのように解釈してよいかわからないため、資料をもとに少し議論したいと考える。

第6は、沖縄を象徴するチャンプルー文化を取り上げ、棒踊りがその他の地域との交流で得た文化を取り入れ、沖縄独自の文化として育まれたものだと述べている。

本田は、「南島踊（ハイヌシマ）と呼ばれる棒踊も、本島、宮古、八重山の各所に行わ

⁴ 当間一郎「沖縄の芸能」オリジナル企画1981年P443より引用

⁵ 当間一郎「沖縄の芸能」オリジナル企画1981年P448より引用

⁶ 本田安次「沖縄の祭と芸能」第一書房1991年P305より引用

れている。南島から入ってきたのでその名があるという。」⁷棒踊りを外来の芸能であると指摘している。沖縄大百科事典によると南島踊は、フェーヌシマとも呼び、「沖縄各地に分布する南方系と見られる民俗芸能の1つ。棒踊の一種だが、麻の繊維を染めた赤褐色のかつらをかぶり、三尺棒または六尺棒の一端に音を出す鉄輪（一厘銭のようなもの）をつけ、奇声を発して飛びはねる所作をとまなうほか、棒技の部と素手の芸の部で構成されるなど、様式も系統も棒踊とは異なる。（中略）装束は、赤かつらに鉢巻、筒袖の上着にたすきがけ、ももひきに脚絆の扮装であるが、地域により若干異なる。」と述べられている。また、八重山地域では、「ハイヌスマ棒、ハニサー棒、獅子棒などという。異国風芸能の一つで、赤い房毛をかぶり、奇声をはりあげながら滑稽みを持つ所作をとまなうところは沖縄と共通するが、獅子舞とかかわりを持つ棒技としての要素が強い。集団でおこなうものと少人数でおこなうものがあり、石垣市新川、竹富町黒島の東筋などに伝わるものは前者、石垣市登野城、平得などに見る形は後者である。いずれも笛、どら、太鼓を音曲に使う。小浜島のダードゥダー、竹富島中筋のシングルロなども南方系の芸能として類縁性を持つため、広い意味でハイヌスマ系と思われるが、棒踊の系統とは類別される。」と述べられている。

外間は「現存する村棒⁸は、三山統一を境に、王朝に支配された村々の武術の主体性・必要性が変化したか、あるいは中央の命令下で取り締まられた結果、ある程度型を変え、村の祭事としての民俗的村棒として残されたものではないだろうか。それゆえにか村棒の中にもかなり武的要素の高いものが散見できる。」⁹と述べている。つまり、ここでは、棒踊りが棒術から舞踊化され、民族的祭事によって演じられているということである。ただ、外間も沖縄における棒術が、南方から伝わったものではないかという指摘もある。本田の南方から棒踊りとして直接伝えられたのか、外間の南方から棒術として伝わり、それが舞踊化され、今日の棒に変わったのかという2つの説が考えられる。

また、与那国島に伝わる棒踊りについて宮里は「今からおよそ260年前、首里の棒術者幸地氏によって伝授され、与那国島に棒術が広まったといわれている。しかし、その後武力による島人の抵抗をおそれた島の役人達は、棒術を習うことを徹底して取り締まった。こうした中で島の人々は、自らを守る護身術として創意工夫をし、祭の演目として粉飾をほどこしながら6尺棒、3尺棒、イララ（鎌）、ダング（櫂）棒、ティンバイ（天張り、笠を意味する）などなどをあみ出し、笛や太鼓を取り入れることによって棒術を『棒踊り』という形で芸能として守り続けてきたものであります。」¹⁰と述べている。鳩間島の棒も与那国のような経緯で今も残されているとも考えられる。

以上より鳩間島で、独自につくられたというよりも、外から伝えられたという可能性が高いと考える。与那国島の棒踊りの由来は、鳩間島と同じ八重山諸島として興味深い話であると考えられる。

⁷ 本田安次「沖縄の祭と芸能」第一書房1991年P305より引用

⁸ 「村棒とはその村落に古くから伝わる棒術、棒踊りを指している。」と外間は述べている。外間哲弘「沖縄空手道・古武道の神髄」平成11年那覇出版社P164より引用

⁹ 外間哲弘「沖縄空手道・古武道の神髄」平成11年那覇出版社P169からP171より引用

¹⁰ 南風原町立中央公民館「沖縄の民俗芸能（1）」東部印刷平成3年P92からP93より引用

質問項目

質問対象者：村の古老、鳩間郷友会芸能保存部長

- ・ 豊年祭において棒は、悪いもの、邪気を払い除け、幸福を願うという意味があるか。そうでなければ、どのような意味があるのか。
- ・ 鳩間島で独自に作られた踊りか。
- ・ 鳩間島の棒踊には、与那国島にあるような歴史があるのか。（与那国島の歴史は、きちんと説明する。）
- ・ フェーヌシマ系の棒踊か
- ・ 黒島の棒と似ているか。
- ・ 使用する棒は、ビロウ（クバ）か檜の木か、それとも鳩間島に生えている木で作っているのか。
- ・ 棒で着る衣装は、古い歴史があるのか。いつ作られたものか。鳩間島で作られたものか。

3.棒は、いつどこで、どのように練習、伝承するのか。

棒は、中学生、卒業生も参加するとのことである。そのうち中学生は2人参加するとのことである。（2002年において）練習場所は、公民館。

質問対象者：中学生

- ・ 棒の練習は、きついか。
- ・ 棒は、身を守るために役立つと思うか。
- ・ 棒を今後、自分の後輩たちに伝えたい、指導したいと思うか
- ・ 豊年祭で演じられる棒踊についての歴史やどのような意味、役割があるのかを聞いたことがあるか、または、知っているか。
- ・ 棒を習うことは、自分の住む鳩間島の芸能文化を受け継ぎ、保存し、伝承することにつながると思うか。

質問対象者：棒の指導者

- ・ 子どもたちに棒を伝承、継承して行ってほしいと思っているか。
- ・ 棒ができる人は、護身術、身を守るためとして役に立つと思うか。
- ・ 豊年祭において棒は、悪いもの、邪気を払い除け、幸福を願うという意味があるか。そうでなければ、どのような意味があるのか。
- ・ 棒に使う棒は、ビロウ（クバ）か檜の木か、それとも鳩間島に生えている木で作っているのか。
- ・ 棒で着る衣装は、古い歴史があるのか。いつ作られたものか。鳩間島で作られたものか。
- ・ 棒の指導者として、いつ頃から指導しているのか。また、どのように決めたのか。

質問対象者：棒を演武する人（成人）

- ・ 子どもたちに棒を伝承、継承して行ってほしいと思っているか。
- ・ 棒ができる人は、護身術、身を守るためとして役に立つと思うか。

- ・ 棒ができることは、自分にとって、鳩間島の芸能や文化を誇りに思い、大切に保存、伝承していきたいという気持ちを強くさせているか。
- ・ いつ、習ったのか。今は、どこで練習をしているのか。

4 身を守るために（護身術）になるのか。

「2.鳩間島でつくられたものか」で述べた事とリンクする部分がある。棒術から棒踊り成立したとするならば、護身術的な要素は高いと考えられる。また、この項目も郷友会において棒術を指導なさる方を紹介していただき、聞き取り調査を行う。

5 棒の棒は、どんな木をどのようにして作るのか。

ここでは、棒の棒と類似すると考えられる古武道における棒術で使用する棒の作り方について述べていく。まず、棒の材質について、仲本は「沖縄で用いられている主な用材をあげると、ビンロウ、アカガシ、イヌマキ、イジュ、マテバシイ、フクギ、オーク、オキナワウラジロガシ等である。」¹¹と述べている。その中でも、ビンロウについて「特に、ビンロウは武術の棒としては勝れており、その特徴はムチミ（弾力性）が勝れていることである。硬さも、また色も黒く艶があり、しまりも良いとされている。相手と打ち合い突き合いして、たとえ折れてもその折れ口は鋭利な槍先と変わってほことしての利用価値がある。ビンロウは、全部硬い針のような細長く強化した繊維からなっている。しかし現在は、ビンロウの原木も少なく得難いので、貴重なものとされている。沖縄では南北大東島に群生する。」¹²と述べている。また、アカガシについても「棒術用の木材として特にヤンバルガシはよいとされる。木目が細く、ねばりがあり、固く強いとされる。それに重さも手頃である。赤檜は、腐朽菌、虫害などに耐えるような抗虫性を持った木材とみられる。」¹³と述べている。棒に使用する木の利用時期について「秋口の木が良い。沖縄では、10月、11月、12月ごろまでが最高。秋材はしまりがあり、乾燥も良い。木食い虫にやられることも少ない。春材は、1月、2月、3月、4月までで、緑を出すために地中の水分を多量に吸い取るので、乾燥しにくく、ひねったり、きれ目が多く、さけ易い。しまりが悪く、柔らかで、虫にも喰われやすい欠点がある。」¹⁴と述べている。

棒の作り方については、「ビンロウまたは、赤檜の木を6尺余りに切り、木目に添ってオノかノミ、沖縄ではエーという工具を使用して、木の根本の方より順次オノを立ててさかせて行くと、正目の材質の良い物がとれる。ゆがんで裂けて行く材質は駄目なので使用しないこと。真径3寸角材を作ったら、6ヶ月か3ヶ月間はそのまま陰干しし、その間材質が裂けたり、ひねったり、曲がったりした場合は、棒を作っても、また曲がるくせがある。しかし、長年月木材をほっておいて、もうこれ以上変型しないと思う時、約3カ年位経ても、材質に変化がなければ、直径1寸くらいの8角棒を造ってゆく。順次、角の方をガラスのかけらでけずって丸くして行く。棒が出来上がったら、わら縄で、強くこすって、み

¹¹仲本政博「沖縄の伝統古武道」那覇出版社 1983年 P72 より引用

¹²仲本政博「沖縄の伝統古武道」那覇出版社 1983年 P72 より引用

¹³仲本政博「沖縄の伝統古武道」那覇出版社 1983年 P73 より引用

¹⁴仲本政博「沖縄の伝統古武道」那覇出版社 1983年 P74. より引用

がきをかける。自然の美しい棒の光沢や色つやを増す。」¹⁵と述べている。

また、棒を保存するための方法として「昔は棒にサメの油を塗ると虫に喰われないし保存に最高の油とされた。それを棒に油を食わずといい、そうすることによって棒に魂が入りその棒に生命が宿るとされていた。数年前までは、南洋屋（屋号）の75歳位のお婆さんが、サメ油を造り、カメやビン等につめて、船持ちにうっていたが、そのサメの油を抽出するために長時間火に掛けるので、周囲に猛烈な悪臭を放ち、隣近所より公害だと言われて、その仕事をやめている。惜しい事である。」¹⁶と述べている。

ここでは、教材化を行う上で具体的な事象が見られると考える。教材化に向けての準備を行いたいと考える。古武道における棒術で使用する棒の作り方等について述べたが、私の推測では、棒踊り等で使用する棒の材質や作り方とは大きな違いはないと考える。

ちなみに、本田は、鳩間島では「本島同様神々は天から降りるとしており、島の中心の拝所である友利御獄には、高い蒲葵の木が生えていて、神はその蒲葵の木を伝わって地上に降りてこられると古老たちは語っている。」¹⁷と述べている。蒲葵の木とは、クバの木のことであり、ピロウの木のことである。仮説として、神とかかわるクバの木を用いて棒踊りに使う棒を作っているとしたら、棒踊りは神とのかかわりの強い意味を持つ芸能であるということが考えられる。

6 郷友会は、どのように組織され、どのように結び付いているのか。また、鳩間島在住の島民とどのように結び付いているのか。

この疑問項目については、教材化を意識した部分であるといえる。社会において人々の結び付きは大切な社会構成要素の1つであると考え。どこの地域でも、また、竹富町のようにいくつかの小さな島々からなる地域でも、日常生活において、目に見えない人々の結び付きは存在すると考える。それが、豊年祭において郷友会という島の行事等を島の外から支えている組織、人々の結びつきであると考え。教材化するにあたっては、そのような具体的な組織の構成、そして、それに携わる人々の思いなどが重要な視点となると考えるのである。目に見えない人々の結びつきを学ぶことは、子どもたち自身にとって、様々な人々に支えられて私たちの生活が営まれていることに気づくことになる。また、人々の結び付きの中でおこなわれている豊年祭における芸能の伝承活動を学ぶことによって、芸能や文化の保存、継承、伝承者の一人となれることを自覚することになると考える。

質問項目

質問対象者：公民館長、鳩間郷友会会長、鳩間小中学校校長

- ・ 鳩間島島内での人々の結び付きについて、島民で青年会など組織化された組織はあるのか。
- ・ 豊年祭の運営について、組織された組織はあるか。また、どのように運営しているか。（豊年祭の日程の決定など似ついておこなう組織があるか。）
- ・ 郷友会との連絡網はあるのか。

¹⁵仲本政博「沖縄の伝統古武道」那覇出版社 1983年 P74～P75 より引用

¹⁶仲本政博「沖縄の伝統古武道」那覇出版社 1983年 P77 より引用

¹⁷本田安次「沖縄の祭と芸能」第一書房 1991年 P25～P26 より引用

- ・ 郷友会と共に鳩間島の芸能や文化を保存、継承、伝承して行きたいという思いがあるか。また、鳩間島に住む子どもたちにもその思いを伝えたいか。それはなぜか。

質問対象者：鳩間郷友会会長

- ・ 郷友会の組織は、どのような役職があるのか。
- ・ 郷友会は、豊年祭の他に、どのようなことで鳩間島在住の島民と結び付きがあるのか。
- ・ 鳩間島の外から鳩間島の芸能や文化を保存、継承、伝承して行きたいという思いがあるか。それはなぜか。

7 調査報告

今回の竹富町鳩間島における調査の教訓を報告したい。まず、今回の調査で、公民館長や島民の方々に多大なご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げたい。今回の調査でわたしたち鳩間島の学生は、フィールドワークにおける多くの注意点を学んだと言える。まず、島の内情を知らないため、いろいろなミスをしてしまう。これを防ぐためには、必ず公民館長を中心とした調査活動を行うことが望ましいと言える。公民館長に調査の趣旨をしっかりと説明した上で、調査対象となる人物を紹介してもらい、聞き取り調査を行うことから調査の第1歩となると考える。その上で、公民館長より島の規則などをしっかりと聞き、しっかりと遵守することである。これが調査の基本であるといえる。

次に、調査においては、安定した生活基盤を用意することである。1週間という短い期間のフィールドワークではあるが、しっかりと生活基盤を確保できなければ、思うような調査は難しいと言える。金銭面的な難題をクリアするためには、公民館や学校などの公共施設の利用が必要になる。しかし、公民館に関しては、地域行事の中心施設となるため、日程が地域の行事と重ならないように注意を払う必要がある。また、学校の利用に関しても難題が多い。そのため、調査は、テントを持ってキャンプ生活をする姿勢、つまり、自らで生活基盤を作るという気持ちで心構えての方がよい。キャンプ生活が安定した生活基盤となるとは言えないが、そのような心構えは必要である。

以上より、言い訳がましくなるが、今回の調査においては十分な調査を行うことができなかったという感を否めない。しかし、自ら鳩間島責任者としては、多くのことを学んだと言える。今後あるであろう後輩たちの調査において、わたしたち鳩間島調査班の経験を残すことが彼らによりよい調査を行う道標となることを期待したい。

①調査で、聞き取りしたこと

- ・ 豊年祭は、西部落と東部落にわかれて、奉納芸能を競い合って演じた。豊年祭まで命があればいいといわれるぐらいの気持ちを持ち、一番すばらしい奉納芸能を演舞するという競争意識を持って行っていたという。
- ・ 昔は、朝から銅鑼や笛などが鳴り響いて賑わいを見せていたという。
- ・ 戦前の頃、西部落に沖縄本島本部から鰹漁船の仕事をしに来た人がいた。その人が、西の棒術を指導して、その年から西の棒は、さらに見応えのある棒になったという。また、その後、えだちしんという警察官の方が、西の部落で棒を指導し

て、その年の棒は、おおいに迫力が増したという。戦前、西の棒は、島外の人から新しい手などを取り入れていた。東は、そのようなことはないという。

- ・ 昔は、西部落の棒の練習、東部落の棒の練習ではお互いにどのような棒を演武するのかということをも秘密にして練習していた。練習は、1ヶ月前からしていた。そして、男は、棒だけでなく、笛、太鼓、ドラの練習をしていた。練習内容は絶対に秘密のため、練習する家の前には、見張りの門番をたてていたという。
- ・ かけ声を掛け合うのは、お互いの息を合わすためだという。打つ時は、「ひいやー」、受ける時は、「ゆい」と2人でかけ声を合わせていたという。
- ・ 戦前は、棒は、西表にあるミカンの木から作っていたという。現在は、棒の指導者が角材を発注してそれから作っている。昔から自作であることがわかった。
- ・ 西と東の棒で共通することは、棒術の基本（受ける、つく、払う、打つなど）であり、異なるのは、笛の曲調（西は女性的、東は男性的）、飾り太鼓（タイコマー）における太鼓の打ち方、演武する棒の型（手数）という。
- ・ 方言で頭を打つ棒の技をトンボー、棒を打つことをシカーシ、足の甲を打つことをヌキという。
- ・ 笛の曲調は、琉球音階とは異なるという。
- ・ 棒の基本は、空手の基本と似ているという。例えば、腰の落とししかた。
- ・ 行事のしきたりとして、きちんと西と東の棒を分けて行っているが、西と東の棒は混ざって奉納されている部分がある。
- ・ 学校においては、生徒だけではなく、職員も豊年祭を始め、島の行事に参加をしている。理由としては、人口が少ないことと、また、職員は島に住む住民としての立場からであるという。
- ・ 里子として鳩間中学校を卒業した高校生は、豊年祭に合わせて帰ってくると、棒に参加している。そのことについて、指導者は、子どもたちに何かプラスになればいいと考えている。しかし、練習時間が短いのが問題点だとしている。
- ・ 里子に棒を指導し参加させるのは、鳩間島に住む以上住民として、鳩間の生活、文化に触れさせるためである。
- ・ 子どもたちにとっては、大勢の人前で棒を奉納することは緊張する機会を与えている。練習する機会を通して、島の人々と接する機会があるという。鳩間島の生活については、海や森などで遊んだことを思い出として大切にしている。
- ・ 島に若い世代が少ないため、里子が豊年祭の棒を支えているということが現実である。彼らには、彼らの育ってきた文化があり、鳩間の棒を継承することは難しいのではないかと考えている。
- ・ 棒を見ていて世代のギャップを感じる。
- ・ 迫力あることが、鳩間の棒の特徴であるが、しかし、現在は、その迫力はない。
- ・ 保存会を作り、鳩間の棒を残そうという取り組みを考えている。

8 まとめ

事前に調査を進める段階で、鳩間の棒は、文献などの資料がないため、困難であった。そのため、早急な資料づくりが必要だという思いが伝わった。鳩間の棒は、鳩間島の西と東に分かれた部落の地域環境から、競い合って、奉納をするという特徴があることが

分かった。戦前においては、よりよい棒を演武し、奉納するために、島外の人から指導を受けていたという話に驚きを持った。そうすることによって、棒の型や手などは、どのように変化していったのか疑問に思った。この調査において、鳩間の棒が、長い歴史の中で、様々な影響を受けて変わっている部分があると考え。しかし、笛、ドラ、太鼓といっしょに神へ奉納するという部分は、大切に守られているといえる。今後、島民、郷友会の連携の中で、保存される棒を追いつけて調査していきたいと考える。

9 事後調査

調査後の活動によって、当初見当をつけていた目的や仮説とは、違う調査結果が見えてきた。棒術の継承・保存を中心に島民と郷友会の結びつきが、最初の教材化の重要な視点となると考えていた。しかし、調査の中で明らかになってきたことは、その結びつきは決して弱いものではないが、継承・保存するという点においては、その協同的な活動がほとんど見られなかった。そこに本調査や教材化における困難さが出てきた。

しかし、事後調査において、棒術を調査する、そして、教材化する視点が変わることによって、行き詰っていた私の活動も徐々によくなっていた。変わった視点の内容は、棒術の継承・保存における島民と郷友会との結びつきではなく、棒術における豊年祭や人との結びつきに視点が変わったことである。

豊年祭と棒術の結びつきにおいては、ウタキの神へ奉納する芸能、それが鳩間島の棒術である。これは鳩間島だけではなく、また、棒術だけではなく、沖縄の祭祀にかかわる場合、祭りと芸能の共通する点であると考え。今年の豊作を感謝し、来年の世果報（ユガフ）を祈る気持ちを込めて、また、意味を含めて棒術を演武するのである。つまり、芸能が祭祀との関わりが強いことを意味する。そこに棒術を学ぶ意義も存在すると考える。

人との結びつきにおいては、たとえば、鳩間島の棒術にあるタイコマー（飾り太鼓）といって集団で演武をするものがある。そこには、多くの人の中で全体を意識して、同じように演武する、または、周りと呼気を合わせることによって、共同体意識の高揚や連帯感強化という役割を果たしていると考えられる。また、振り棒、柵棒などといった二人組になり棒を打ち合うものがあるが、怪我などを防いだり、勇壮ですばらしい演武をするために、相手と呼気を合わせるということが必ず必要になる。

このように棒術は、周りにいる複数の他者、相手である他者との相互の協調性によって、演武されていると考える。

当たり前のことのように思えるが、以外に子ども達にとっては、もしくはそれ以外の人にとっても、このような点は気づきにくいと考える。棒術には、祭りとの関わりにおいては、沖縄文化の精神的な面で、学びがある。人の関わりにおいては、社会性の基盤とも言える協調性の精神を高める機能があるのではないかという推測の上だが、その点で学びがあると考え。

事後調査における聞き取りによってわかったこと（浦崎さんより聞き取り）

- ・タイコマーは、むかしは、一列に15人ぐらい、合計で30人ぐらいの集団で演武していた。その光景は圧巻であった。
- ・昔、タイコマーの一番前で、なぎなたを演じる人は、代々の家系のものが行っていた。

- ・タイコマーにおいて、西と東の太鼓のたたき方は異なる。西は、太鼓を打った後、頭から回して、また打つ。東は、太鼓を打った後、バチを投げ捨てるように腕を後ろへ伸ばす。
- ・タイコマーにおいて、大切なことは、周りと呼吸を合わせること。一定のリズムで太鼓を打つこと。
- ・昔のタイコマーでは、共同体意識の強さを感じた。
- ・振り棒などの二人で打ち合わせる棒は、掛け声で相手に意思表示をする。つまり、今から打つぞ、という合図である。
- ・サンシキは、鳩間島のウタキの神々の集まる場所として伝えられている。そこで芸能が行われる理由である。豊年祭における芸能は、奉納芸能である。

参考文献

- 本田安次「沖縄の祭と芸能」第一書房 1991 年
外間哲弘「沖縄空手道・古武道の神髄」那覇出版社平成 11 年
南風原町立中央公民館「沖縄の民俗芸能 (1)」東部印刷平成 3 年
当間一郎監修「琉球芸能事典」那覇出版社 1992 年
当間一郎「沖縄の芸能」オリジナル企画 1981 年
玉木繁編著「琉球横笛再考」那覇出版社 2000 年 5 月